## 属人区長の書簡 (2008年4月)

2008/04/27

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

主のご復活によって私たちの心に喜 びが溢れ出る復活節の只中に、主の ご復活の喜びに心躍る復活節にあ たって、この手紙を送ります。ご受 難とご死去の暗澹とした日々の後 に、イエスが御父から受け取った不 滅の新たないのちの喜びが訪れまし た。それは、キリストが死に至るま で、しかも十字架の死に至るまで、 へりくだり従順であられたからで す。「このため、神はキリストを高 く上げ、あらゆる名にまさる名をお 与えになりました。こうして、天上 のもの、地上のもの、地下のものが すべて、イエスの御名にひざまず き、すべての舌が、『イエス・キリ ストは主である』と公に宣べて、父 である神をたたえるのです。| (フィリピ2,9-11)

これこそは、教会が最初から力強く 宣言していることであり、私たちキ リスト者がすべての人々に伝えなけ ればならないことです。教皇様は、 先日のUrbi et Orbi(ローマと全世界 へ)のメッセージで次のように述べ ておられます。イエス・キリストの 死と復活は「この上ない愛のわざで す。愛の勝利です。この愛は、罪と 死の奴隷から私たちを解き放ってく れました。そして、この愛は歴史の 流れを変え、人間のいのちに打ち消 すことのできない新たな意味と価値 を与えました。| (ベネディクト十 六世、2008年3月23日『ローマと全 世界への復活祭メッセージ』)

聖ホセマリアとともに過ごした数多 くの復活祭のことが記憶によみがえ ります。この時期を過ごす喜びが外 にも現われ、傍らの私たち皆に伝 わって来ました。その喜びは、私た ちが神を知り、神と交わり、神を愛 するようにと、神から与えられた信 仰、希望、愛に基づくものでした。 この超自然的な歩みは、歴史の中で 繰り広げられたと同時に歴史を超越 するもので、主の栄光ある復活とい う出来事に支えられています。「な ぜならキリストは、美しい思い出と 素晴らしい模範を残して行ってし まった過去の人物ではなく、今も生 きる御方であるからです。キリスト は生きておられる。イエスは私たち とともにいて下さる神、エンマヌエ ルなのです。神はご自分の民をお見 捨てにならないことが、キリストの 復活によって明らかになりました。 『女が自分の乳飲み子を忘れるであ ろうか。母親が自分の産んだ子を憐 れまないであろうか。たとえ、女た ちが忘れようとも、わたしがあなた を忘れることは決してない。』(イ ザヤ49.15)と主は約束してください ましたが、今その約束は果たされま した。神はなおも人の子との交流を 楽しみにしておられるのです(格言

の書8,31参照)。」(聖ホセマリア、『知識の香』102)

ベネディクト十六世は、今年の復活 祭のメッセージで、ブルガタ訳の詩 編138の一節resurrexi et adhuc tecum sum (詩編138,18ヴルガタ 訳) 私は復活し、なおあなたととも にいる、を題辞にしておられます。 典礼では、復活祭の主日ミサの入祭 唱に使われています。「復活の太陽 が上ったとき、教会はこのことばの うちに、イエスご自身の声を見いだ しました。イエスは死から復活する と、歓喜と愛に満たされながら父に 向かって叫びます。『私の父よ、私 はここにいます。私は復活し、あな たとともにいます。そして永遠にあ なたとともにいます。あなたの霊は 決して私を見捨てることがありませ んでした』。」(ベネディクト十六 世、2008年3月23日『ローマと全世 界への復活祭メッセージ』)

このマリア年を通じて、私たちは一 日中、全てのことの中に聖母をより 深く「入れて」いこうと努めていま す。ロザリオの栄光の神秘を考察す るとき、それは何と簡単なことで しょう。創立者は、死者の中から甦 られたイエスをご覧になったときの 聖母の幸福の中に、深く入り込まれ ました。福音書は、聖母への主のご 出現のことを何も語っていません が、キリスト者は皆同じ確信を持っ てきました。「最初の弟子たちとと もにいらした聖母が(使徒言行録 1.14参照)、死者の中から甦られた 神の御子に出会わなかったというこ とがあり得るでしょうかしと、ヨハ ネ・パウロ二世は尋ねられました。 (ヨハネ・パウロ二世、1997年5月 21日一般謁見の講話) 明らかにそん なことはないはずです。マリアこ そ、栄光のイエス・キリストがまず 初めにご出現になった方であったは ずです。キリストは、十字架の下で 一緒に大変な苦痛を味わったマリア

の心を、超自然的にも人間的にも筆 舌に尽くしがたい喜びで満たされた はずです。いつもあがない主と固く 一致しておられたお方が、勝利をお さめた救い主にまみえる喜びを味わ わないでおられることなどありえま せん。

私たちもこの場面を注意深く考察し ましょう。創立者の言葉を頼りにす ることができます。「復活された 一。イエスはよみがえられて、もは や墓にはおられない。生命が死に打 ち勝ったのです。主は、聖母マリア に姿をお現しになりました。夢中に なって主を愛していたマグダラのマ リアにも―。ペトロと他の弟子た ち、さらに、主の弟子であり、マグ ダラの女よりも、もっと主をお愛し している私たちにも一なんというこ とを口にしてしまったのでしょう 一、とにかくその私たちにも姿をお 見せになりました。」(聖ホセマリ

ア、『聖なるロザリオ』栄光の第一神秘)

この教えに従ってイエスを探し求 め、イエスに出会い、イエスと付き 合わなければなりません。イエスは いつも生きておられ、日々の様々な ときに私たちの傍らを通り、また神 として御父と聖霊とともに私たちの 心の奥深くにお住まいなのです。こ のような考えは、単に信心深い空想 に終わるのではありません。イエス は、私たちが使徒信条で宣言するよ うに、至聖なる方として天の御父の 右に座しておられるだけではなく、 教会に、そして恩恵によってキリス ト者各自の内にもおいでになりま す。主は実際に私たちの内に、そし て私たちの傍らにおいでになるので す。それは肉眼で確かめることはで きませんが、様々なことから分かり ます。人として向上したいという、 聖霊が心に注ぐ聖性への熱望、人々 が神に近づくのを助けるために出会 いを求めて出かけるように内から働きかける使徒としての焦燥、人別なにとしての無好の人人、社会的地位や宗教の人人、おっていまがない。これはないではないではないではないではないです。これがいるではないがあるといるではないです。これにないではないではないではないではない。といるではない。

 存される生けるイエスは、この世におけるイエスの現存の保証・根拠・完成にほかならない」(聖ホセマリア、『知識の香』102)

何よりもご聖体のおかげで、イエス の命が「私たちの命」になるので す。「『私を愛する人は、私の言葉 を守る。私の父はその人を愛され、 父と私とはその人のところに行き、 一緒に住む』(ヨハネ14,23)と言っ て、最後の晩餐で使徒たちに約束な さった通り、キリストの御生命は私 たちの生命となりました。それゆ え、キリスト者はキリストと同じ心 を持ち、キリストに倣う生活をしな ければなりません。そうすれば、聖 パウロとともに『生きているのは、 もはや私ではありません。キリスト が私の内に生きておられるのです』 (ガラテア2,20)と叫ぶことができ るようになるのです。」(同上、 103)

復活されたキリストと、その神秘体 に生きるメンバーとの親密な一致の おかげで、私たちは一人ひとり、こ の手紙の冒頭で引用した詩編の言葉 を自分に当てはめることができま す。教皇様が復活祭メッセージで述 べておられます。「私たちは気づき ます。すなわち、今日、復活したイ エスが父に述べた『私はなおも永遠 にあなたとともにいる』という言葉 は、間接的に私たちにも当てはまり ます。私たちは『神の子ども、しか もキリストと共同の相続人です。キ リストとともに苦しむなら、ともに その栄光をも受けるからです』 (ローマ8,17参照)。キリストの死 と復活によって、私たちも今日、新 たないのちに復活します。そして、 キリストと声を合わせて叫びます。 『私たちも永遠に神とともにいたい と望みます。神は限りなくいつくし みと憐れみに満ちた私たちの父だか らです』| (ベネディクト十六世、

2008年3月23日『ローマと全世界へ の復活祭メッセージ』)

私たちが、キリストにおいて新たに 生きるには《古い自分》を捨てるよ うに努めなければなりません。つま り、自分の内にあって、神のいのち とは相容れないすべてを捨て去るこ とです。ですから、聖ホセマリアが ロザリオの栄光の第一神秘で結論づ けておられことは、もっともなこと なのです。「罪ゆえに死ぬことのな いよう一、また、私たちの霊的復活 が永遠であるようにと願います。こ の一連の祈りが終わる前に、あなた は主の御足の傷に接吻する─、そし て、幼いゆえにもっと大胆な私は、 主の傷ついた御脇に寄り添うので す。| (聖ホセマリア、『聖なる口 ザリオ』栄光の第一神秘)主に対す る軽重様々な背きを心から忌み嫌う 心を養っていますか。三位一体が、 私たち皆に必要な清さと謙遜の徳を

与えて下さるように、聖母を通して 願っていますか。

ロザリオの栄光の第一神秘をゆっく りと黙想することから、もう一つの 決心を引き出せるでしょう。キリス トを知らないか、主を知らないかの ように振る舞っている人々に近づ き、急いで主を探し、そして主に従 うように急き立てることです。そう してのみ、彼らは不滅の喜びに浸る ことができるのです。復活祭を祝う ことで私たちは、使徒職の熱意を倍 加し、復活されたイエス・キリスト に出会った後の使徒たちや聖なる婦 人たちのように振る舞うよう促され ます。彼らは、どのような困難にも ひるむことなく、勇敢に絶えず主の 復活を告げ知らせ、数限りない人々 を主に近づけたのです。

聖なる教会における神の子であるキリスト者として、私たちは、信仰の 礎である主の復活という良い便りを

あらゆる所に広めなければなりませ ん。聖ホセマリアの言葉を思い出し てください。「地上の至るところに ご自分の民がいることを、主は望ん でおられます。ある人々には、砂漠 での生活をお与えになります。人間 社会の流転に関わり合わずに、自ら の証しによって、人々に神の存在を 思い起こさせるためです。またある 人々には司祭職を託されます。そし て大部分の残りの人々には、社会の 中で諸々の什事に従事することをお 望みになります。したがって、これ らのキリスト信者は、自己の仕事を 展開してゆくあらゆる場に、キリス トの精神を広めねばなりません。エ 場に、研究所に、田畑に、職人の什 事場に、大都市の街路や山あいの小 径にキリストの教えを伝えねばなら ないのです。」(聖ホセマリア、 『知識の香』105)

3月の第一週に、創立者が度々訪問された二箇所の聖母巡礼地を訪れ

て、祈る喜びを得ました。1日は口 レットに行きました。当地の権威者 が、《聖なるナザレの家》に至る歩 道の一つに聖ホセマリアの名を献じ ました。その道に沿って十字架の道 行があり、創立者の著作からの言葉 が飾られています。8日の土曜日に は、ファチマに行きました。前日に リスボン到着し、週末の小旅行で心 掛けている通り、ポルトガルの皆さ んの兄弟姉妹とのひと時を過ごしま した。様々な思い出が頭をよぎりま した。大きな困難のさ中に、この二 つの巡礼地で聖ホセマリアは、あら ゆる時代の娘たち息子たちとともに 祈りました。そして、全ての子供た ちを愛する責任の重さと、同時に素 晴らしい喜びとを味わったと、繰り 返されていました。

皆さんに伴われてこの二箇所を訪ね たのは、このマリア年を感謝し、オ プス・デイにおけるイエス・キリス トの弟子として忠実に振る舞う固い ス・キリストとの一致をますます固くするよう努力するなら、聖母に助けられて、成就できます。聖ホセマリアの取り次ぎを通してそれをお願いしましょう。今月の23日は、創立者の堅信と初聖体の記念日です。創立者の助けで、私たちももっとご聖体の人になれるでしょう。

私の意向のために祈りつつ、私に付き添うことを忘れないでください。 創立者から聞いたように、皆さんが 同伴してくれることで私は力を得、 主に無理な願いをすることができる と確信しているのです。

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2008年4月1日

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2008nian-4yue/ (2025/10/30)